

令和 5 年 5 月 26 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00559

研究課題名（和文）日本手話における複合述部の統語分析

研究課題名（英文）Syntactic Analysis of complex predicates in Japanese Sign Language

研究代表者

浅田 裕子（Asada, Yuko）

昭和女子大学・グローバルビジネス学部・准教授

研究者番号：10735476

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、母語話者の協力の下、日本手話における複合述部の音韻・統辞・意味特性を体系的に調査し、記述された特性を導く統辞分析に取り組んだ。具体的には、以下の4つの現象を研究対象とし、同時調音・非利き手の保持など手話言語特有の音韻特性を検証しながら、音声言語における従来研究も視野に入れ、分散形態論の枠組みで、調査で得られた複合語・結果構文の特性を人間言語の構造から説明する分析を構築した。

1. 日本手話の（動詞由来）複合語；2. アメリカ手話・日本手話における限定複合語の語順と音韻；3. 諸手話言語で観察されている複合動詞の他動性調和原則（影山1993）違反；4. 主要部後続型手話言語の結果構文

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、従来研究で進んでいなかった日本手話複合語の特性を体系的に調査し、音声言語研究ではよく知られている複合語類型の三タイプ（並列・限定・従属）が異なる音韻特性を示すことを明らかにした。これは手話言語研究において初めて確認された事実である。更に、本研究では、この音韻特性の違いが音声日本語の複合語三タイプの音韻特性の違いと類似していることを指摘し、手話と音声というモダリティの差異を越えた人間言語の複合語特性を包括的に導く分析を提示した。次に結果構文の研究では、動詞と結果述部の語順の問題を手話言語特有の言語処理要因に帰す分析をもって説明し、複数の手話言語の結果構文の解明に貢献した。

研究成果の概要（英文）：The main aims of this study were to comprehensively describe phonological, syntactic, and semantic properties of compounds and complex predicates in Japanese Sign Language with continuous help from native signers and to propose a syntactic analysis that explains these properties. Specifically, I dealt with the following four types of linguistic phenomena: 1. Compounds in Japanese Sign Language <sequential and simultaneous compounds>; 2. Attribute type of compounds in American Sign Language and Japanese Sign Language; 3. Violation of the Transitive Harmony Principle (Kageyama 1993) observed with some complex verbs in sign languages; 4. Resultative constructions in sign languages with the word order “Subject-Object-Verb-Result”

研究分野：統辞論

キーワード：日本手話 統辞論 複合語 複合述部 分散形態論

1. 研究開始当初の背景

生成文法理論の枠組みにおける音声言語の複合語・複合述部に関する研究は、1960年代より現在に至るまで記述的、理論的に著しい発展を遂げた。しかしながら、手話言語における複合述部の研究は、2000年代以降もほとんど進んでおらず、音声言語研究でよく知られている特性や類型分類が手話言語でも成立するかどうかについて明らかになっていない部分が多い。具体的には、複合述部研究の課題として次のようなものがあつた（*は非文法的な例を示す）。

表1 複合述部研究の主な成果と残された課題

主な研究成果	残された課題
<ul style="list-style-type: none"> ● 複合述部の分類 <ol style="list-style-type: none"> 1. 語彙的複合動詞 (V-V) (例: 食べ歩く) 2. 統語的複合動詞 (VP-V) (例: 食べ終わる) 3. 結果・叙述二次述部 (XP-V) (例: 車を赤く塗る, 魚を生で食べる) 	手話言語の複合述部特性記述が、類型論の分類記述の中で位置づけられていない。例えば、参照文法書文献(Quer et al. 2017 等)にもこれらの分類に関する記載はない。
<ul style="list-style-type: none"> ● 他動性調和原則 (Transitive Harmony Principle) (影山 1993) 他動詞+他動詞 (例: 買い取る, 蹴り倒す) *他動詞+非対格動詞 (例: *切り落ちる, *売れ飛ばす) 	香港手話・ドイツ手話において他動性が一致しない複合動詞が報告されているが(Lau 2012, Loos 2017等)、なぜ手話言語ではそのような振る舞いが観察されるのかという問いが残る。
<ul style="list-style-type: none"> ● 時制的類像性条件 (Temporal Iconicity Constraint) (Li 1993) <動作が連続して起こる場合、その順番は連続する動詞の順番に反映される> (例: 撃ち殺す, *殺し撃つ) 	ドイツ手話の結果構文において、‘(銃で)撃つ死ぬ’という語順に加えて、‘(銃で)死ぬ撃つ’のような時制的類像性条件に違反する例が報告されているが(Loos 2017)、なぜこれら二タイプの語順が可能であるのか、理論的分析はなされていない。

手話言語の複合語研究は、アメリカ手話を中心に増えつつあり、Scalise & Bisetto (2009) が提唱する複合語の三つの下位タイプの分類 coordinate (並列)・attributive (限定)・subordinate(従属)が、アメリカ手話・フランス手話・イタリア手話でも成立することが示されている(Vercellotti & Mortensen 2012, Santro 2018 等)。

表2 Scalise & Bisetto (2009) による複合語の三タイプ

	coordinate (並列)	attributive (限定)	subordinate (従属)
例	mother-child Bosnia-Herzegovina	redskin high school	tree eater bookseller

しかしながら、手話言語の複合語研究では、これら三つの下位タイプの音韻形態特性に関する記述はほとんどない。例えば、日本語の複合語研究では、三つの下位タイプが表3のような音韻特性をもつことが知られているが(影山 1993, Sugioka 2002, Yumoto 2010 等)、手話言語複合語の音韻特性については議論が未だなされていなかった。

表3 日本語の動詞由来複合語の三タイプ

意味特性	並列 (動詞+動詞)	限定 (修飾詞+動詞)	従属 (内項+動詞)
例	行き来・貸し借り	ペン書き・薄切り	窓ふき・手紙書き
音韻特性	連濁なし・起伏アクセント	連濁あり・平板アクセント	連濁なし・起伏アクセント

2. 研究の目的

これらを背景に、本研究は日本手話における複合語・複合述部の音韻・統辞・意味特性を体系的に記述し、それらの特性を導く統辞分析を構築することを目的とした。

複合語・複合述部は、生産性・再帰性・構造的あいまい性など、人間言語の特性を非常によく反映している言語的単位であり、手話言語を視野に入れたそれらの研究は、音声言語研究だけではとらえきれなかった人間言語の基本的設計の理解に貢献する可能性がある。

3. 研究の方法

本研究では、4年間の課題期間中、合計21回にわたり、日本手話の複合語・複合述部の音韻・統辞・意味特性の観察・記述を目的とするインタビューセッションを実施した。この調査では、計12名の日本手話母語話者を研究協力者とし、日本手話の複合語・複合述部に関する調査項目

ごとに、文法性の容認度を判断してもらった。2020 年度以降は、コロナ下でオンラインや動画による調査形式を余儀なくされたが、当初予定していた項目のほぼすべてについて調査を実施することができた。

調査は、音声言語などで観察されている複合語・複合述部の基本的特性から、より複雑な文法特性へと段階的に進めていった。複合語においては、研究開始前は動詞由来複合語のみを研究対象とすることを考えていたが、初期段階で、名詞+名詞型の並列複合語(例 /犬猫/) 及び修飾詞+名詞型の限定複合語(例 /子供服/)も動詞由来の並列・限定複合語(例 /読み書き/・/常勤/)と同じ振る舞いをする事が確認できたため、それらを含めた日本手話の複合語を網羅的に調査することにした。この研究は、能美由希子氏・下島恭子氏との共同研究が基盤となっている。

これら一連の調査を通じて収集したデータに基づき、先行研究で提案されている諸仮説を検証・考察し、より説明的妥当性の高い一般言語理論へとつなげていった。尚、本研究での調査は昭和女子大学倫理審査委員会の審査で承認された方法を遵守した。

調査項目とそれらの調査を実施した時期は、以下の通りである。

1. 日本手話の動詞句等位接続構造 (2019 年度前半)
2. 日本手話の(動詞由来)複合語 <連続表出> (2019 年度後半-2020 年度)
3. 日本手話の(動詞由来)複合語 <同時表出> (2021 年度)
4. アメリカ手話・日本手話限定複合語の語順と音韻 (2022 年度後半)
5. 「動詞+動詞」複合体の他動性調和原則違反 (2020 年度後半)
6. ニタイプの結果構文 (2019 年度後半-2022 年度)

4. 研究成果

本研究では、日本手話母語話者の協力と多くの貴重な助言により、言語現象の体系的記述を目指す課題にとっては必要不可欠である高いデータ精度を実現しながら、詳細な検証を行うことができた。調査において、母語話者も無意識的に行っている精密な使い分けや規則が働いていることが明らかになり、日本手話が人間言語としての複雑な特性を有していることをあらためて確認することができた。毎回のインタビューの後には、結果を明文化し、ろうの研究協力者たちと共有することで、更なるフィードバックを得ることができた。

2019 年度から 2020 年度前半にかけては、課題の第一段階として、語彙的複合語・複合動詞、等位接続述部、そして二次結果述部の特性を観察する定性・定量調査を実施した。2020 年度後半から 2021-2022 年度は、第二段階として、得られた調査結果に基づく体系的記述とその統辞分析を国内外の学会・論文で発表することができた。研究開始当初は予想していなかった発見も多く、特に、音声日本語の複合語でよく知られる動詞由来複合語の下位タイプにおける「連濁」の有無(例: 薄切り(うすぎり)・パン切り(パンきり))にみられるような音韻特性の差異が、日本手話の動詞由来複合語下位タイプでも同様に観察されることが確認でき、音声言語・視覚言語のモダリティを越えた、一般言語理論への重要な含意を得ることができた。

具体的には、3 で挙げた調査項目 1-6 について、以下のような成果を得ることができた。各項目の最後に公刊された研究実績を示す。

1. 日本手話の動詞句等位接続構造

動詞句が等位接続されている(1)の例のような wh 疑問文を研究対象とした。

- (1) $\underline{\quad\quad\quad}$ $\underline{\quad\quad\quad}$ $\underline{\quad\quad\quad}$ wh
[MOTHER / _ / LIKE] [FATHER / _ / DISLIKE] WHAT?

‘母が好きで、父が嫌いなものは何ですか?’

従来研究では、(1)が示すように、他の多くの言語のように日本手話でも並列接続された動詞句の中から wh-要素を抜き出し、文末に移動するいわゆる全域移動 (across-the-board movement、以下 ATB 移動) が容認されることが報告されていた (小谷 2009)。しかしながら、(2)のような wh 句の文中残留(wh in-situ)を許容する日本手話において、(3)のような等位接続構造からの ATB 移動の場合に、wh 句の文中残留が許されるかどうかについての報告はなかった。

- (2) $\underline{\quad\quad\quad}$ $\underline{\quad\quad\quad}$ $\underline{\quad\quad\quad}$ wh
[FATHER / WHAT / LIKE] WHAT? ‘父が好きなものは何ですか?’

- (3) $\underline{\quad\quad\quad}$ $\underline{\quad\quad\quad}$ $\underline{\quad\quad\quad}$ wh
*[MOTHER / WHAT / LIKE] [FATHER / WHAT / DISLIKE] (WHAT)?

‘母が好きで、父が嫌いなものは何ですか?’

本研究では、(3)が示すように、等位構造から ATB 移動が起きる場合、wh 句の文中残留は容認されないことを新たに確認し、(1)にあるような残留なしの場合との容認度の対比を説明する分析を提示した。

(Asada 2019)

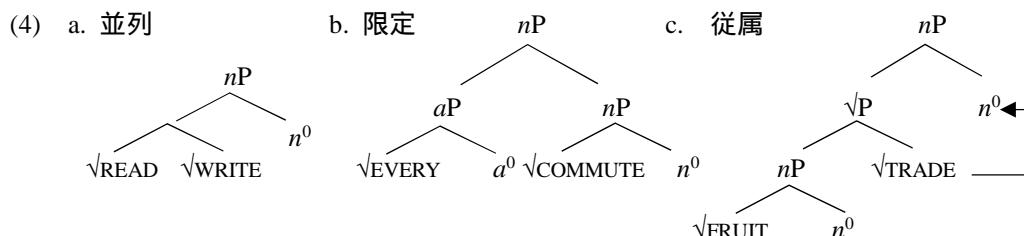
2. 日本手話の(動詞由来)複合語 <連続表出複合語 (sequential compounds)>

群馬大学の能美由希子氏・下島恭子氏との共同研究において、音声言語の複合語分類でよく知られている「並列・限定・従属」の三タイプ (Scalise & Bisetto 2009 等) (表 2・3 参照) が日本手話にも存在することを確認し (Asada, Nomi & Shimojima 2022)、これら三タイプがそれぞれ異なる音韻特性をもつことを明らかにした。アメリカ手話・イタリア手話・フランス手話で三タイプの類型が成立することはすでに報告があったが (Vercellotti & Mortensen 2012, Santro 2018)、これら下位タイプの音韻特性に関する報告は、手話言語研究では初めてのことである。具体的には、辞書形でそれぞれ二回の手動きの繰り返しをもつ二つの要素から成る複合語を抽出し、三つの下位タイプの複合語例において手の動きの重複のリズムが *aabb* (リズムを英小文字で表示する) からどのように変化するかについて調査した。音韻特性を表 4 にまとめる。

表 4 日本語の動詞由来複合語の三タイプ

	並列	限定	従属
例	READ^WRITE ‘読み書き’	EVERY^COMMUTE ‘常勤’	FRUIT^TRADE ‘フルーツショップ’
音韻重複	A+B = [ab]	A+B = [abb]	A+B = [aabb]

この観察事実を踏まえ、三タイプの複合語は、次のような統辞構造をもつと提案した。



分散形態論の枠組みで提案された(4a-b)の構造は、日本語の複合語の三タイプの音韻特性(表 3)も同様に説明できる可能性がある。手話と音声というモダリティの差異を越えた人間言語の複合語特性を包括的に導く分析であることを示唆した。

(Asada, Nomi & Shimojima 2022, Asada 2022)

3. 日本手話の(動詞由来)複合語 <同時表出複合語 (simultaneous compounds)>

2 の研究に続き、手話言語特有の音韻特性である利き手・非利き手による同時表出に着目し、複合語の振る舞いを検証した。興味深いことに、連続表出の場合と同様、同時表出についても並列複合語(動詞+動詞)と限定複合語(修飾詞+動詞)では、異なる音韻特性が確認できた。これも、手話言語研究において初めて確認された観察事実である。並列複合語(例 /believe/+/pray/ ‘信仰’)では、利き手と非利き手による同時表出は容認されないが、限定複合語(例 /box/+ /pack/ ‘箱詰め’)では、利き手と非利き手による表出が容認されるのみならず、同時表出が必要である。更に、この対比は、日本語の動詞由来複合語の二タイプの複合語の音韻特性の対比と類似している(表 3)。並列複合語(例: 読み書き)では、同化現象である連濁はおこらず、アクセントは起伏型となるが、一方、限定複合語(例: ペン書き)では、連濁がおき、アクセントは平板になる。この観察を踏まえ、二言語の並列・限定複合語の音韻・意味特性を統一的に説明する統辞分析を構築し、2022年6月の国内学会で発表した。また、この分析も含め、本研究課題開始当初からの複合語に関する研究成果を総括し、2023年2月公開の手話言語学書籍の一章で発表した。

(浅田 2022, 2023)

4. アメリカ手話・日本手話限定複合語の語順と音韻

2, 3 の成果を踏まえ、修飾詞と主要部で構成される限定複合語の主要部と修飾詞の語順と音韻に関してアメリカ手話と日本手話を比較する研究を開始した。日本手話の連続表出の限定複合語(例 /PROVISORY /+ /WORK/ ‘アルバイト’)では第一要素のみが音韻弱化し、第二要素により強い強勢(stress)がおかれる。複合語を構成する二つの要素間の強勢についてのこのような非対称性は、諸手話言語で古くから報告があるが (Klima & Bellugi 1979 等)、なぜそのような非対称性があるのかについてはまだ明らかになっていない (Vercellotti & Mortensen 2012)。一方で、音声言語においては、複合語の強勢(stress)が語頭要素に置かれるか、語末要素に置かれるかについては個別言語間で差異がある(例: blackbird (英語); poisson-chat ‘catfish’ (フランス語) (Goedemans & van der Hulst 2005, Tokizaki 2017 等))。では、手話言語の複合語にみられる強勢のパターンは、視覚言語固有の特性によるものだろうか? 本研究では、この問いに答えるべく、限定タイプの複合語の主要部・修飾部の語順と音韻特性に関してアメリカ手話・日本手話のデータを検証し、その分布を説明する分析を提案した。

(Asada 2023)

5. 「動詞+動詞」複合体の他動性調和違反について

香港手話・ドイツ手話など、複数の手話言語において、他動詞+非対格動詞からなる複合動詞が容認される例 (/ SHOT ^DIE / ‘撃ち殺す’など) が多く報告されている(Lau 2012, Loos 2017 等)。これらの複合動詞は、日本語の複合動詞について提唱されている他動詞調和原則(影山 1993(表1))の違反となるが、これまでの手話言語研究では、なぜ他動詞+非対格動詞タイプの複合動詞が容認されるのか、またこれらの例が他動詞+他動詞、非対格動詞+非対格動詞などの他動性が調和している複合動詞と同様の統辞構造をもつのか、などの理論的議論はなかった。本研究では、まず、日本手話においても他の手話言語と同様、(5)-(6)のような例が容認されることを確認した。

- (5) MAN / WOMAN / STAB ^DIE. ‘男が女を刺し殺した.’
 (6) MAN / TREE / CUT ^FALL. ‘男が木を切り倒した.’ (学会発表 2021 年)

ただし、これらの例の他動詞に続く要素 /DIE/, /FALL/ などは、状態を表す形容詞とも分析できるため、本研究の調査では新たに用例を増やし、(7)-(8)のような形容詞用法をもたない非対格動詞で容認度を調査した。

- (7) *MAN / APPLE / SELL ^REMAIN. (直訳) ‘男がりんごを売り残った.’
 (8) *FRIDGE / APPLE / BUY ^BE. (直訳) ‘冷蔵庫にりんごを買ってある.’

その結果、これらの例は、(5)-(6)の例とは異なり、容認されないことが確認できた。「残る」「ある」などの非対格動詞を含む複合動詞は、容認されない。(5)-(6)の例と(7)-(8)の対比は、一見、他動詞調和原則の違反のように見えていた(5)-(6)のような例の述部が実は複合動詞ではなく、動詞+状態形容詞から構成されていることを示唆する。諸手話言語の観察も含めて、これらの観察事実の分析は、今後取り組むべき課題である。

6. 結果表現構文の二タイプ

日本語の「車を赤く塗った」という例に対応するような日本手話の結果構文の特性を調査した。音声言語の研究では、日本語のような主要部後続型言語の二次結果述部は動詞の前に位置し、結果述部が後続する例は報告されていない(Nedjalkov 1988, Haider 2016)。しかしながら、主要部後続型言語であるドイツ手話・ロシア手話では、主語(S) 目的語(O) 動詞(V) 結果述部(R) という SOVR 語順の構文の存在が報告されている(Loos 2017, Pasalskaya 2018)。また、なぜ手話言語に限ってこのような語順が観察されるのかという問いに対する説明もなされていなかった。

本研究では、まず日本手話における結果表現構文の語順について調査を行った。その結果、(9)-(10)のような SOVR 語順と SORV 語順の二つの構文が存在することが明らかになった。

- (9) SOVR eye widening
 MAN CAR PAINT RED, IX(*man/car). ‘男が車を赤く塗った.’
 (10) SORV eye squint
 MAN CAR RED PAINT, IX(man/*car). ‘男が車を赤くするために塗った.’

複数の母語話者との個別インタビューの結果、日本手話においては、(10)-(11)の例の訳が示すように、これら二つの構文が意味的に区別されていること、及び文末指さしの指示対象が異なるという事実が確認できた。この観察を踏まえ、本研究では、更なる聞き取り調査を実施し、結果構文と意味的に近い、起動構文(inchoative construction) (例(11))との関連性を見出した。

- (11) Inchoative eye widening
 TWO DAYS LATER CAR RED, IX(*man/car). ‘(車を塗った後、二時間して) 車は赤くなった.’

起動構文と SOVR 構文は、非手指標識と文末指差しに関して共通する振る舞いを示し、それらは様態動詞の動作の目的を意味する(10)のような SORV 構文の非手指標識と文末指差しに関する振る舞いとは異なる。これらの検証を踏まえ、本研究では、手話言語の SOVR 構文は、日本語の「車を赤く塗った」のような結果述部が動詞句の中に埋め込まれている単一の節から成る結果構文とは異なる、「車を塗って、(そして)それが赤くなった」という意味に対応する等位接続構造をもつ複文構造をもつと提案した。この分析では、(9)の SOVR 構文では様態動詞が主要部となる動詞句と(11)のような起動構文が等位接続されており、結果述部の埋め込みをもたない。この仮説は、手話言語では深い中央埋め込み(center-embedding)をもつ構文は好まれないという議論と整合するものである(Geraci & Aristodemo 2016 等)。更に、本研究が主張する日本手話の結果構文の複文構造の分析は、手話言語が外在化の過程において許容できる中央埋め込みの構造的「深さ」に関する含意をもたらす。本研究の議論が正しければ、手話言語の外在化では2つ以上の位相主要部(phase head)の中央埋め込みは容認されにくいという一般化が可能である。

(Asada, to appear)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Yuko Asada, Yukiko Nomi and Kyoko Shimojima	4. 巻 28
2. 論文標題 Compounds in Japanese Sign Language: Associate Professor Teaches Twice	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 273, 286
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Asada	4. 巻 22
2. 論文標題 General use coordination in Japanese and Japanese Sign Language	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Sign Language & Linguistics	6. 最初と最後の頁 44-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/sll.18003.asa	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Asada	4. 巻 13
2. 論文標題 Across-the-board dependencies in Japanese Sign Language	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Conference Handbook of Theoretical Issues in Sign Language Research Conference 13	6. 最初と最後の頁 49-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Asada	4. 巻 26
2. 論文標題 Another type of list buoys in Japanese Sign Language: Emergence from gesture	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Korean Linguistics 26	6. 最初と最後の頁 311-322
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅田裕子	4. 巻 164
2. 論文標題 動詞由来複合語の統辞構造 日本語・日本手話における観察から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語学会第 164 回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 198-204
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Asada	4. 巻 8
2. 論文標題 Attributive compounds in sign language	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Phonological Externalization	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計9件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 浅田裕子
2. 発表標題 日本手話の複合述部 母語話者の直観と非母語話者の視点
3. 学会等名 第93回日本英文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuko Asada, Yukiko Nomi, Kyoko Shimojima
2. 発表標題 Compounds in Japanese Sign Language - Associate Professor teaches twice
3. 学会等名 The 28th Japanese/Korean Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 浅田裕子
2. 発表標題 第一言語としての日本手話
3. 学会等名 神田外語大学多言語コミュニケーションセンター講演会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 浅田裕子
2. 発表標題 手話言語の形態論
3. 学会等名 TOSLL（東京手話言語学研究会）春期講座「手話言語の研究理論ーろう者と聴者が共存するために」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuko Asada
2. 発表標題 Across-the-board dependencies in Japanese Sign Language
3. 学会等名 The 13th Theoretical Issues in Sign Language Research Conference（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 浅田裕子
2. 発表標題 動詞由来複合語 の 統辞構造 日本語・日本手話における観察から
3. 学会等名 日本言語学会第 164 回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浅田裕子
2. 発表標題 日本手話の外在化 インターフェイスへの帰結
3. 学会等名 インターフェイス・セミナー（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yuko Asada
2. 発表標題 Weak hand holds of number signs of Japanese Sign Language
3. 学会等名 The 57th Annual Conference of Chicago Linguistic Society.
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浅田裕子
2. 発表標題 形態にみられる同時性・手話表現とジェスチャー
3. 学会等名 慶應言語学コロキウム「手話言語学夏期講座」（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松岡和美/内堀朝子 [編]	4. 発行年 2023年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 292
3. 書名 『手話言語学のトピック：基礎から最前線へ』第4章「複合語」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------